

【要約】

- 1 序章 ―ジンメル社会学の諸問題―
- 2 存在の形式から生成の形式へ ―根本問題としてのカントとゲーテ―
- 3 生の認識論 ―生を体験する―
- 4 生の倫理 ―生を個性化する―
- 5 生社会学 ―集団的な生の運動―
- 6 社交 ―形式の奉仕者から生の表現者へ―
- 7 結論

本論文はジンメルについての研究である。ジンメルは社会学者として有名ではあるが、また同時に哲学者でもある。その研究の中心は社会学から哲学へと次第に移っていき、晩年になると、ジンメルは生の哲学の研究に専念するようになる。本論は晩年のジンメルの生の哲学から、ジンメル社会学を読み解くことで、新たな解釈の可能性を提示する。ジンメル社会学は形式社会学としても知られているが、そこで論じられる「形式」や「相互作用」の概念を「生」の運動として読み解くことで、新たな理解が可能になる。その成果はジンメル社会学だけではなく、広く社会学一般にまで敷衍することができるだろう。社会学ではこれまで、行為や経験の根底にあるものを社会の構造や機能、象徴や言語に求めてきた。しかし本論は社会の根底にある「生」や「生成運動」に注目することで、既存の社会学とは別の「もう1つの社会学」の可能性を開示する。

本論文の全体構成は以下の通りである。まず1章でジンメル社会学の問題点を整理し、生の哲学から見直すことで、それらの問題点が解決されると提示する。ジンメルは独自の生の哲学を提唱するが、それは彼の長年の哲学研究の成果が結実したものである。そこで2章では、生の哲学が成立する以前の哲学研究を含めたジンメル哲学の根本性質について論じる。これにより、ジンメルの生の哲学がどのような思想の流れの中から生じてきたのかが明らかとなる。ジンメル哲学が目指したのは、カント哲学とは異なる生成運動を基盤にした哲学である。3章ではカントの認識論と比較しながら、ジンメルの生の哲学の認識論が明らかにされる。また4章では同じくカントの倫理学と比較しながら、生の哲学における倫理について述べられる。これら3章、4章によってジンメルの生の哲学における主要テーマが解題され、それらの観点から、5章でジンメル社会学を再解釈していく。生の哲学から形式社会学を読み解くことで、これまで曖昧であった諸概念を明らかにし、不十分であった理論的な基盤を補完される。さらにはジンメルがただ「心的相互作用」としたものを「錯綜的相互作用」「純粹相互作用」「形式的相互作用」の3つに精緻化し、形式社会学の新たな側面を提示している。これらの成果を踏まえ、本論ではジンメル社会学を形式社会学から生社会学として位置付け直す。6章では、ジンメルの生社会学をカイヨワやホイジンガの遊戯論と比較することで、社会学における位置づけを明らかにし、さらに生社会学の持つ意義について述べられる。

次に各章の概略について説明する。1章ではジンメルの形式社会学の諸問題を明らかにし、それらを解決するのに生の哲学が有用ではないかと提示される。ジンメルの形式社会学の問題は、その根本原理が示されないことに起因し、結果的に「心的相互作用」や「形式」の概念が曖昧なものとなっている。そこで本論では、形式社会学の根本原理を明らかにするために、『社会学』の1章で述べられる社会が成立するための3つの先天的条件に注目する。1つ目は認識の問題で、諸個人は社会的な表象によって断片化されて認識されるが、個性は決して社会的表象に収まることはない。それではどのようにして我々は他者を認識しているのかについてジンメルは考察する。2つ目は実践の問題で、我々は社会化された存在であると同時に、社会化されない社会外的な存在でもある。このような二重の存在性を、われわれはどのように生きているのかが考察される。3つ目は個人と社会の関係についての問題であり、我々はいかにして他者とともに在り、そして社会をつくることができるのかについて述べられる。本論では、これらの3つの問題を生の哲学と結びつけることで、ジンメル社会学の根本原理を補完し明確化することを試みる。それは次章以降で、生の認識の問題〔3章〕、生の実践（倫理）の問題〔4章〕、生の共同性の問題〔5章〕としてより詳細に述べられることになる。

ジンメルは晩年に自らの哲学を生る哲学として結実させるが、それは紛れもなく長年の哲学研究の成果である。そこで2章では生の哲学を論じるにあたり、それ以前のジンメルの哲学研究を踏まえつつ、ジンメル哲学の根本的性質を確認する。哲学研究において、ジンメルが目指したものは、カント哲学を乗り越えていく道筋であった。カントと同じく経験の存立を問う超越論的水準を問題としつつも、カントとは異なる仕方でジンメルは研究を進める。このカントとジンメルの違いを、本論では普遍者の同一性により諸存在を理解する存在の哲学と万物の生成運動から諸存在を理解する生成の哲学の違いによって説明する。特にゲーテによるメタモルフォーゼに注目する自然理解の方法は、ジンメルの独自の哲学形成に大きな影響を与えた。

3章ではジンメルのレンブラント論を手掛かりにして、生の哲学の認識論について考察する。カント哲学の認識論であれば、諸対象を普遍者の同一性を基準として認識することができるが、生成の哲学では諸対象の生成運動を捉えることで認識が成立する。生成運動を捉えるとは、自らの中で対象の運動を反復することであり、それをジンメルは体験と呼ぶ。我々はこの体験を通して他者の固有性を捉えることができる。それは社会化された他者とは異なる最もその人らしい性質である。

4章では生の哲学からについて考察する。カント哲学における倫理では、普遍者の法則と自らを一致させることが重要になるが、ジンメルの生の哲学では生成運動の強度を高めることが肝要になる。この生成運動を強化する個人の実践をジンメルは個性的法則として説明する。個性的法則では、個人が全体的生と孤独に向き合い、それを引き受ける責任を負う。そこで自らの生を全体的な生成運動の中で捉えなおし、より個性的になることで、生成運動は強化される。これは個人の外部や社会から与えられる責任ではなく、自らに内

在する責任である。この内在する責任を引き受けることで、我々は社会的存在でありつつも、社会外的な在り方をも可能にする。

生の哲学は個人の生成運動に焦点が当てられていたが、5章ではジンメルの形式社会学を集団の生成運動として読み解く。これにより、曖昧であったジンメル社会学の根本原理を補完することができる。本論では、ジンメルが「相互作用」と呼ぶものを集団の生成運動として解釈し、「形式」を生成運動の形式と考える。そして生成運動はその潜在性の強弱により3つに分け、最も潜在性が高い水準を錯綜的相互作用、潜在性が低い水準を形式的相互作用、そして両者の中間を純粹相互作用とする。錯綜的相互作用は物質レベルまでの生成運動を含んだものであり、集団としての単位はそこにはない。純粹相互作用の水準において、複数の生成運動が同調し、運動の方向性をそろえることで萌芽的な集団形成が可能になる。これは「心的」な水準の出来事であり、我々はそれを「あたかも～であるかのよう」にイメージする。例えば秘密結社では、構成員達は皆があたかも血の繋がった兄弟であるかのような連帯性や平等性をイメージする。そして形式的相互作用の水準では生成運動の顕在性が増し社会的な規則として機能するようになる。そこでは合理性や効率性が重視され、心的な生成運動の性質から変質することになる。例えば、秘密結社に対する構成員の心的な連帯性は集団への忠誠心に転換され、集団は構成員を効率的に配置することで集団の存続を効率的に行おうとする。これにより、集団内には階層ができ、さまざまな規則が設けられることになる。以上のように、ジンメル形式社会学の中には心的な運動の原理と合理性や効率性に基ついた運動の原理があることが明らかになった。本論では、このように生成運動を中心に読み解いたジンメル社会学を「生社会学」として新たに定義している。

6章では、この生社会学をカイヨワ・ホイジンガの遊戯論とジンメルの社交論を比較することで社会学全体における位置づけを考察する。カイヨワは聖・俗・遊の図式の中で遊びを考察しているが、そこでは遊は俗の緊張緩和を目的とした社会的機能として位置づけられる。それに対してホイジンガは遊びを社会に従属させるのではなく、遊びこそが文化や社会を生み出す源泉であると捉えている。生社会学の枠組みで考えると、カイヨワの議論は形式的相互作用だけを扱ったものであることが分かる。この水準では合理的な意味合いが重視されるので、遊びのもつ合理的な機能しか読み解くことができない。一方のホイジンガは純粹相互作用の水準から遊びを捉えており、遊ぶ人間の心的な出来事、つまり楽しさや興奮に注目している。これまでの社会学の枠組みでは、どちらかといえばカイヨワの遊び分析の方が理解しやすい。しかし生社会学の視点に立てば、ホイジンガの遊び理解を十分に視野に入れることが可能で、さらにカイヨワとホイジンガの双方の遊び研究の繋がりも考察することができる。このように生社会学は社会学全体の領域に新たな可能性をもたらすことができる。